

いざ、出陣! 恒例の初台阿波踊り大会

毎年恒例の「初台阿波踊り大会」が今年も9月22日・23日に開催され、初台リハビリテーション病院から総勢17名の職員有志が参加しました。写真は23日に参加した職員が、衣装に着替えて「いざ、出陣!」の意気込みとともに笑顔でパチリの図。この後、初台商店街にて思う存分、踊りを堪能してきました。昨年同様、沿道で声をかけていただきました患者さま・ご家族の皆さん、温かいご声援ありがとうございました。



リハ病院にて再会

当院が開院して6年が経過しています。患者会というほど大きな集まりではないのですが、開院時期にご入院をされていた方々が、年に一度の同窓会を喫茶からで行っています。他のお客様の混まない時間帯を選び、過去何年も行っているそうです。きららスタッフから、皆さまが再会したときの様子を伺うと、笑顔で過ごされた模様です。皆さまの素敵なお時間を、当院で過ごして頂いたこと、本当に嬉しく感じています。



利用者さまと一緒に消火訓練を体験

9月1日に防災の日を迎えたが一足先に、消防署隊員の指導のもと、防火訓練を行いました。館内放送で出火場所をお知らせした後に、火元から離れた階段を利用しての避難誘導、その後、消火器を使っての模擬消火訓練をしました。「重たい消火器は地面に置いて消火しよう」など消防隊員ならではの的確なアドバイスをいただいて、施設の利用者さまと一緒に楽しく体験学習できました。



“五町連合納涼盆踊り大会”に参加しました!

今年も参加させていただきました。皆さんから「いつもお世話になっています」とお声がけいただいたり、スタッフから「患者さんも遊びにいらしたんですね」とご挨拶をしたり、「もうすぐ世話になるよ!」と冗談をいただいたり、私共をご存知ない方からは「あそこに診療所があったのね」「今度診てもらおうかなあ」など、たくさんのお声をかけていただきました。当センターは、いつも地域の皆様と共に歩み、お役に立ち続けたいと考えております。今後とも宜しくお願い申し上げます。



季節を感じるレクリエーションで楽しいひとときを

在宅総合ケアセンター成城の病棟では毎月レクリエーションを行っています。今回は、季節を感じて頂くため、お月見にちなんで白玉を作りました。患者さまの開始の挨拶から始まり、皆さんとても意欲的に参加され、笑顔や笑い声の絶えない共同作業の時間となりました。黒蜜、あんこ、カットフルーツなど、患者さまご自身でお好みのものをトッピングしていただき、個性豊かな白玉が完成しました。今後も笑顔にあふれた楽しい時間となるように企画していくたいと思います。



第20回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会を開催して



大会事務局長
初台リハビリテーション病院
診療部長
菅原英和

9月6日・7日に日本摂食嚥下リハビリテーション学会の第20回学術大会が当院の主催で開催されました。この学会は、「摂食嚥下障害の患者さんに必要なリハビリを提供するためには多職種連携によるチーム医療が不可欠である」という信念のもと、全国から医師、歯科医師、看護師、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士、歯科衛生士、栄養士、介護福祉士等の多職種が決起し、20年前に設立されました。設立当初1,600人だった会員数は、現在11,000人以上に膨れ上がり、摂食嚥下の領域では世界的に見ても例がない程大きな団体になりました。



大会当日運営を振り返って

The 20th JSDR
5拠点の輝生会スタッフのべ約300名がボランティアとして当日運営に関わりました。予想をはるかに超える参加者で、初日の15時には準備した抄録が売り切れてしまうという事態も発生し対応に奔走しました。各会場は、大勢の参加者でがあふれる状況で、上層の会場へのエレベーターには長い行列が出来、会場担当は誘導に大わらわでした。3会場間でシャトルバスの運行をしましたが、こちらも利用者が多く対応しきれずに、急きよ数台のタクシーを借りて運行する対応をとりました。2日間を終えたボランティアスタッフの達成感に満ちた笑顔が印象的でした。リハビリ業務とは勝手が違いましたが、輝生会スタッフのチームアプローチ力が発揮された本学会でした。

文責：初台7階病棟チームマネジャー 恩田暢子（言語聴覚士）



基本理念と方針

- 「人間の尊厳」の保持
- 「地域リハビリテーション」の推進
- 「主体性・自己決定権」の尊重
- 「ノーマライゼーション」の実現

患者さまの権利

- 人権を尊重される権利
- 最善の医療を受ける権利
- 自らの意志で選択・決定する権利
- 自己の診療の情報や記録を知り、求める権利
- プライバシーの保護を求める権利

第20回 日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会 ランチョンセミナーと模擬カンファレンス

自宅で作る「嚥下調整食3」料理の調理ポイント ~初台リハビリテーション病院のレシピ紹介~

輝生会では昨年『脳卒中後のおいしいリハビリごはん』という本を出版しました。これは、当院で提供する「ソフト食」について、食材の選択・加工方法、レシピを紹介した書籍です(本の中では“なめらか食”と表記)。ランチョンセミナーでは、この本に掲載しているレシピを紹介しました。

当院でのソフト食とは、「舌と上あごで押し潰すことが可能な硬さ」「口腔内でまとまりやすい」と定義する食形態です。食材をペーストにする食事よりも、形を残すことが可能ですが、調理の難易度がやや高いため、退院後に自宅で作る際は悩みも多い食形態です。卵や豆腐に比べ、調理方法がイメージしづらい魚の調理方法に関しては、特に質問が多いです。焼き魚や煮魚では、冷めると硬くなり、口腔内でまとまらず、ぼろぼろと広がってしまいます。そこで、自宅でも作りやすい調理方法を、書籍の内容よりも更に簡単な調理ステップで、ご家族、ヘルパーさんが作ってみよう、と思える内容にアレンジし、鮭、カラスガレイ、海老のレシピを紹介しました。

会場には、在宅に関わる全国の栄養士・言語聴覚士・歯科医師・看護師等が500名程集まり、セミナー終了後に

「模擬カンファレンス」

「脳卒中後の摂食嚥下障害のある方が自宅に帰るための準備について、全国から集まった仲間と退院支援について考えよう」という呼びかけで始まりました。本企画は、船橋市内で医療・介護に携わる職種が集まる船橋市地域リハビリテーション研究会で開催している勉強会の一つで、これを全国から集まった人たちで実施してみようという主旨で開催しました。医師・歯科医師・看護師・介護職・セラピストなど様々な職種が、全国各地から80人ほど集まりました。多職種・多施設のメンバーで構成された8~9人のグループで、事前に想定された摂食嚥下障害の患者さんについて、自宅での生活を安全に送るための方法を、時には立ち上がり、時には笑いを巻き起こしながら1時間ほど話し合いました。どのグループからも、ご本人やご家族の状況、周囲の環境など多岐にわたる意見が聞かれ、両者が安定した生活を送ることについて白熱したり取りとなりました。その中で出てきた、頑張り過ぎないという意味での「ふわ

は意見交換も行われました。これからも、輝生会の特徴である「一目見て食べたくなる・おいしそうと思える料理」をレベルアップさせながら、適切な食形態の提案をおこない、安心して帰っていただくための強力なサポートをしていきたいです。

文責／初台栄養部 濱 美彩子（管理栄養士）



ふわ介護」という言葉が印象的でした。自宅生活はご家族の協力が不可欠です。特に、食事に問題がある場合は、調理から工夫が必要になることが多い、肺炎になつたら…という心配も常に抱えていると思います。そんな時、周りのサポートも上手く活用しながら「ふわふわ介護」を実践できたら、自宅生活の可能性が広がるのではないかでしょうか。これからも、一緒に「ふわふわ介護」を目指していきたいと思います。

文責／船橋教育研修部チーフ 高野麻美（言語聴覚士）

第20回 日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会 シンポジウム報告特集

観て、感じて、噛んで・食べておいしい嚥下食を提供するためのシステムを考える

2名の管理栄養士の登壇後、輝生会に属する調理師を代表し発表させていただきました。調理師は6階の調理場で、栄養士とともに料理を作っています。「美味しい食べてもらいたい」という共通の目的がありながら、専門性が異なる調理師と栄養士は、日々の業務の中でぶつかることもあります。そこで、昨年度2職種合同勉強会を行いました。これは、調理師からは料理の技術を、栄養士からは嚥下障害の病態と目指す食形態を提示しあい、話し合いを重ね、一緒に新しい嚥下食メニューを考案するものです。メニューを立案し、試作を繰り返す過程でお互いを理解しあい、ス

ムーズな業務運営につながるきっかけとなりました。

今回シンポジウムに参加し、他の病院・施設でも創意工夫をして、更なる技量の向上を図る上で苦慮されていることが垣間見えます。また、従来の病院食という概念の上に、発想や挑戦、実行力を持ち続け「新たな病院食」の時代を構築し始めているのだと実感しました。

「食べる喜び支える楽しさ」の大会テーマが示すように、食事をされる患者さまにこれからも楽しんで頂けるよう、調理場より努力と挑戦をしていきたいと思います。

文責／初台栄養部 鈴木久生（調理師）

摂食嚥下リハの先にあるものーみんなで考える胃瘻、経管栄養「倫理的視野から」

胃瘻からの経管栄養と適切なリハビリテーションによって経口摂取ができる、ADLやQOLが向上する患者さまがいる一方で、胃瘻を造つてその後の配慮が不十分である症例や胃瘻があたかも延命手段のようになっている症例についての問題も指摘されています。胃瘻によって改善が期待できる患者さまと、改善が期待できない患者さまとの線引きは難しく、予後予測はもとより、何をもって「改善」や「価値」と考えるか重要な問題です。実際にはその判断は容易なことではありません。今後の高齢化社会において、医療者・家族・本人として直面する問題です。

私達自身が臨床経験を踏まえ、様々な立場の考え方を知り、真剣にディスカッションして考えを深めていく必要があると考えた企画です。様々な臨床場面を想定した質問文に対して皆さんにスマートフォン・携帯電話を経由して回答をもらい、集計された結果を参考しながら、コメントーターを含めた会場全員でディスカッションを進めるという初めての試みでした。

多くの方々にアンケート調査、会場へご来場いただき、参加型のシンポジウムが成功したと思います。

文責／初台リハケア部長 嶋 亜希（看護師）

摂食嚥下リハにおけるITを利活用した情報提供強化の取り組み

今回、私が参加させて頂いたセッションでは摂食嚥下に関するIT化についての発表(演題4つ)と、発表後にスマートフォンや携帯電話を使いアンケートを行い、その場で結果を表示させてディスカッションを行う参加型のものでした。

発表内容は主に電子カルテ関連の内容で、摂食嚥下に関する評価や検査を現場でどのように有効利用するのか、それをITを利用して実現されている先生方の発表で、非常に貴重なアンケート結果とディスカッションを行うことができたと思っております。

個人的には、VE(嚥下内視鏡検査)VF(嚥下透視検査)をどのように録画し管理をするのか、決まった規格や方法が

確立されていない中で当法人の行っている方法やシステムの紹介と今後の展望などを紹介させて頂きました。



おそらく今回の学会会場で…もしも過去にも放射線技師が参加したことはないかもしれません、貴重な経験ができたと思っております。

文責／初台診療支援部長 佐野 真（放射線技師）